

多言語主義空間における通訳

田村かのこさん

往復書簡、2020年6月-2021年2月

かのこさんへ

こんにちは、

前回オンラインでお話してから少し時間が経ってしまいました。あれから世界はぐんぐんと動き始めているように思えますが、かのこさんはいかががお過ごしでしょうか。

readでかのこさんが書かれたメッセージを拝見しました。「トランスレーターは、黒子でも透明人間でもロボットでもない、1表現者である」、まさにその通りですね。実はこの文章を読みながら、トランスレーターとダンサーを重ね合わせていました。フランスで（振付家ではない）ダンサーを、interprèteと呼ぶことがあります。通訳者もしくは解釈者という意味です。今までダンサーは、振付家の提供する振り付けを「黙ってダンスで通訳する」存在であると捉えられてきました。しかしこれに抵抗して、ダンサーに言葉を取り戻し、彼・彼女らが操り人形ではなく主体的に作品に関わっていくことを重視する動きも生まれています。

通訳に関して最近心に引っかかっていることがあります。

『Can one lead a good life in a bad life?』というスピーチで、ジュディス・ボトラーは「（古代ギリシアにおいて）公的空間はそもそも多言語主義の空間として考えられておらず、翻訳の実践の義務も含まれていなかった」と言及しています。ここから1つの問いが生まれます。

古代ギリシアから続く今までの公的空間が単一言語主義を念頭に構築されてきたとして、多言語主義としての公的空間は、現在のそれとは本質的に異なった構造が必要だとしたら？ そしてその空間においては私たちのメンタリティ自体を変容させなければならぬとしたら。ロボットなど最新のプログラム技術を使った通訳がより

快適な単一言語主義を突き詰めるものならば、生身の通訳者はそれとは異なるやり方で、多言語主義としての公的空間を開くキーになれるのかもしれませんが。

このまだ見ぬ多言語主義としての公的空間は、一体どのような場所になり得るのでしょうか。思いついたことをリストにしてみます。

- 同時に複数のことが起きる。
 - 起こることを完全には理解できない。
 - そこで使われているのは言葉だけではない。
 - 多言語の声が聞こえる。
 - 誤解が生じた場合の気まずさを受け入れる。
 - 他の人（人間以外も含める）へ注意深く耳をかたむける。
- ...

リストはもっと長くなるでしょう。かのこさんとのやり取りを通じて、多言語主義としての公的空間がどう出現可能なのか、探っていければと思っています。

この間メールでも書きましたが、私が短い動きをする映像のリンクを添付いたします。かのこさんは、その動作を「通訳」していただけますか。また、それに伴い感想や意見をいただければ幸いです（その他、思いついたことがあれば何でも）。

それではよろしく願いいたします!

ユニより





ユニさんへ

こんにちは。お手紙と映像ありがとうございました。

地球の裏側に住む人とも同じ不安を抱えて生活しているのに毎日の生活では誰とも会わないという日々が続いて、すっかり狂ってしまった距離感とゆがんだ時空間にしばらく戸惑っていましたが、最近はそれにも慣れてきて不思議な心持ちでいます。現実がイマジネーションを凌駕するような状況の中で、多言語主義としての公的空間を想像してみる行為は、先の見えないこれからを考える上での1つの希望になり得ると感じました。

ユニさんが紹介してくださった内容や考え方をふまえて、いただいた映像を多言語主義の公的空間に向けて「通訳」するということについて考えてみました。

まず通訳のプロセスを少し分解して考えてみると、

Aが発言・表現する→通訳者がそれを受け取る→Aの表現した内容を理解・解釈する→解釈した内容を、伝えたい対象であるBの持つ言語形態・コミュニケーション方法に変換する（この変換は自動的に行われるのではなく、さまざまな工夫と創造性を伴う）→Bに向けて発言・表現する→Bがそれを受け取る

ということになると思います。これでも簡略化していますが。

今回私からお送りする映像は、ユニさんの映像の「通訳」にはなっていません。なぜなら上記の通訳プロセスを、多言語主義の公的空間（つまり通訳として出力するべき言語が1つでない状態。言語=人の言葉とも限らない）を想定しながら、誰に向けての通訳かわからないなかで（つまりBが誰なのかわからない。1つの言語コミュニティ

ではないかもしれないし、人間でないかもしれない)、ユニさんの身体言語を1回で簡単に別の言語に置き換えることはできないと思ったからです。

そこで、まずはinterprèteとしての解釈を行う前の段階として、「シャドーイング」を行いました。シャドーイングは語学学習や通訳の短期記憶を鍛えるのに使われるテクニックで、発話者の言ったことを追いかけるようにしてその通り発話するというものです。インプットとアウトプットのあいだをなるべく短くすることを目指すので、そこに解釈を挟み込む余地はありません。とりあえずユニさんの動きをそっくり真似することで、メッセージを私の身体に通して受け取ってみた、という段階です。

ユニさんなら、多言語主義の公的空間に向けた通訳のプロセスとして、次にどんなステップをふむと思いますか？ 従来の空間における通訳はAからBを1人でつなげますが、新しい公共空間では通訳のプロセスも複数人による多層的なものでも良いかと思いました。

それでは、お返事を楽しみにしています。

かのこより





かのこさんへ

こんにちは、お手紙と映像どうもありがとうございます!

シャドーイング、拝見しました。これは、私の身体をかのこさんの身体に憑依させることに近いのでしょうか? だとすると、通訳はやはり大変なお仕事ですね。様々な言葉や身体を憑依させるには、元の器が丈夫でないと壊れてしまいそうです。真似は受け取り方のひとつであるという考えにとっても魅力を感じています。また、かのこさんが最後に書かれていた、「従来の空間における通訳はAからBを1人でつなぎますが、新しい公共空間では通訳のプロセスも複数人による多層的なのでも良い」との文章にもなるほどと思いました。ぜひ試してみたいですね。ただ、それは次のお楽しみに取っておき、今回の手紙では1回目とは少し異なるアプローチを試してみたいと思っています。

多言語主義の公的空間において、例えばある植物が発言したとします。その植物の言葉は、その植物にしか分からない(たぶん)。その言葉を人間へ向けて通訳するとします。もちろん、植物の言葉を完璧に理解できるとは限りません。確実には理解しきれない内容を、想像の力を用いて、理解し解釈しなければならない。その場合、通訳者は限りなく創作者へと近づくはずです。多言語主義の公的空間では、もしかすると、通訳者が創造の中心を担うのかもしれませんが。この創造プロセスを、「通訳的制作」と仮に呼ぶとします。通訳的制作は、通訳者でない者がする制作と何が異なるのでしょうか? 具体的にどのような手つきが出現するのか、かのこさんが書かれていた通訳のプロセスを見返してみます。

「Aが発言・表現する→通訳者がそれを受け取る→Aの表現した内容を理解・解

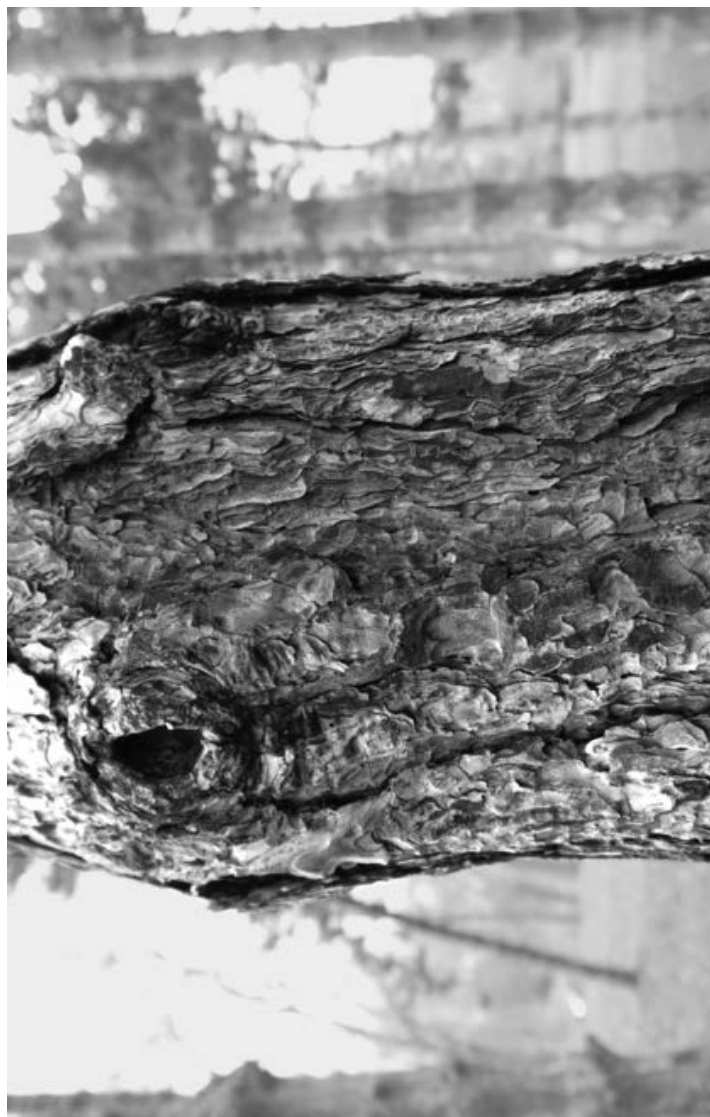
釈する→解釈した内容を、伝えたい対象であるBの持つ言語形態・コミュニケーション方法に変換する（この変換は自動的に行われるのではなく、さまざまな工夫と創造性を伴う）Bに向けて発言・表現する→Bがそれを受け取る」

通訳的制作においては、創造のソースが誰から来たのか（A）と、創造を誰へ渡すのか（B）をかなり意識しています。これが従来の制作と異なる点のひとつではないでしょうか。A（から受け取ること）とB（へ受け渡すこと）無しでは、通訳的制作は成り立たない。つまり制作が、自分以外、少なくとも2人の他者へと開かれています。こうした開かれ方に私は興味を抱いています。このように他者へと開くことで、制作の質は変化するのでしょうか？ 通訳的制作手法を応用し普段の制作で用いることで、普段の制作にどのような性質の変化が起り得るのでしょうか。

今回の手紙では、この通訳的制作の手つきをなぞる試みをしたいと思っています。かのこさんには2種類の短い映像をお送ります。ひとつは、かのこさんのシャドーイング映像のある植物に見せながら説明するもの（映像1）。ふたつ目は、話しかけた3日後に撮影した同じ植物の言葉（返事?）です（映像2）。かのこさんには、通訳的制作の手法を用いて、この植物の言葉を私に伝えて頂きたいと思っています。つまり、通訳のプロセスにおける、A=植物、B=私になります。媒体は、映像、音声、テキスト等、特に決まりはありません。また、もし上記以外の通訳的制作のアイデアがありましたら、そちらを採用して頂いても構いません。普段かのこさんが行う通訳業務からは少し離れた提案かと思いますが、お返事頂けると幸いです。よろしく願いいたします。

ユニより





ユニさんへ

こんにちは。「通訳的制作」のご提案ありがとうございます。興味深く拝見しました。

今回通訳的制作の手つきをなぞる試みとして、

A=植物 → 通訳=私 → B=ユニさん

の構図を設定していただきましたが、実はユニさんが映像1で植物に私のシャドローイング映像を説明している時点で、すでに1つの通訳的制作が行われていると感じました。しかも私が提案した「複数人による通訳プロセス」を経て。なぜなら、私のシャドローイング映像はもともとユニさんのメッセージを通訳する最初のステップとして行ったもので、ユニさんがそれを受けて、植物に言葉で伝えるというもう1つの通訳行為を行っているからです。

A=ユニさん → 通訳プロセス1=私によるシャドローイング

通訳プロセス2=ユニさんによる映像の説明 → B=植物

通訳プロセス1のときにはBの「創造を渡す存在」が意識・想定できていなかったのに対して、通訳プロセス2では明確なBが存在することも面白いですね。

さて、もう1つの通訳的制作「A=植物 → 通訳=私 → B=ユニさん」を行うために、映像2を見ながら描いたドローイングを送ります。これは、通訳のプロセスにおけるノートテイキングにあたるかと考えています。先日お伝えしたプロセスでは割愛していましたが、私は通訳として表現者Aからことばを受け取るとき、必ずメモをとります。このメモは、そのあと私がAの言葉を理解・解釈し、Bに向けて発言・表現するための設計図、または楽譜のようなもので、そのメモに沿って、Aのことばを私のことばで再生する

のです。数年経っても、自分の取った通訳メモを見返すと、そのときのことが再生できるときもあります。

しかし今回、その再生のプロセスはユニさんに行っていたかなければなりません。私のドローイングから、情報を読み取り、Aから発せられたメッセージをユニさんの頭の中で立ち上げ直して欲しいのです。受け取り手の耳に届いた瞬間から勝手に意味を成していくことばと違って、多言語主義の空間においては再生のプロセスもさまざまな可能性がありますね。通訳プロセスと受け取り手Bの境界もあいまいになってきた気がします。

A=植物 → 通訳プロセス1=私による（ノートテイキングとしての）ドローイング

通訳プロセス2およびB?=ユニさん

↑再生するのは「通訳者」か「受け取り手」か？

植物からのお返事が、ちゃんとユニさんに届きますように。

かのこより



映像とデッサンのやりとり

